

# 「社会的な遊び」概念についての考察

## — 保姆坂内ミツの子どもの遊びへの視点 (1924～1937年) —

向山 陽子

(2017年10月14日受理)

### 要 旨

坂内ミツは、著作「幼児の遊びと導き方」<sup>1</sup> (1937) において、4、5歳から8、9歳までをも対象とした子どもの遊びを、「体育方面の遊び」「室内の遊び」「年中行事と遊び」「社会的な遊び」の項目に分類し、それぞれの遊びについてその導き方（遊びを見る視点と注意事項）について述べている。

本研究は、昭和戦前期における坂内の「社会的な遊び」の概念形成の過程を辿り、「社会的な遊び」が意味する内容について考察するものである。

坂内が、「一人では遊べない。幾人か心を合わせて遊ぶのでなければ遊べない遊び」と定義した「社会的な遊び」の概念は、関東大震災後における子どもたちにとっての外遊び環境復興への切実な期待と、子どもの遊びと遊ぶ子どもたちの育ちへ向けた深い観察眼によって形成されたと言える。また、坂内がいう「社会的な遊び」とは、室内室外を問わない遊びであり、社会へ向けての興味関心が育ちつつある子どもたちによって遊ばれる社会を営む大人の姿や仕事を模した遊びであること、加えて、大人を模して遊ぶ中で、さらに社会人としての芽生えが生まれ、社会の仕組みを理解していく、7、8、9歳位の子どもの最も楽しんで遊ぶ遊びであると結論付けることができた。

尚、本文中の旧仮名遣い及び旧字体は、新仮名遣い、新字体で表記し、下線は筆者が付した。

キーワード 坂内ミツ、子どもの遊び、昭和戦前期、末田ます、神原キク

## 1. はじめに

1

坂内ミツ (1887～1956) は、高等師範学校保姆兼教諭・私立幼稚園主任保姆・園長・保育者養成校教師・私立短期大学教授として、大正・昭和戦前・戦後を生きた人物である。また、保姆が著作を著すことが稀な昭和戦前期にあって、保姆として子どもの遊びを収集・分類し、子どもたちの「円満な」<sup>注1)</sup> 育ちを保証し、母親たちに伴走する立場から、子どもの遊びと導き方に関する著書や論考を残した。

本研究は、坂内の著作『子供の遊ばせ方』<sup>ii</sup>と、本研究のテーマである「社会的な遊び」を分類項目とした、「幼児の遊びと導き方」での坂内の論考を、ほぼ同時期における子どもの遊びの実際に関わる論考・記録と比較・考察して、坂内の「社会的な遊び」の概念形成の過程を辿るとともに、「社会的な遊び」が意味する内容について考察する。

## 2. 坂内の「社会的な遊び」概念形成の過程

ここでは、坂内が、『子供の遊ばせ方』と「幼児の遊びと導き方」を著わした1924～1937年と同時期に坂内と互いに影響を与えあったと思われる人物の論考・記録を取りあげ、坂内の論考と比較・考察する中で、坂内の「社会的な遊び」概念の形成過程の手がかりを探るものである。

### （1）末田ます「幼児の遊場」（1930）と、坂内ミツ『子供の遊ばせ方』、「幼児の遊びと導き方」（1924～1937）

末田は、「当時児童遊園事業の最も発達していた」<sup>iii</sup>アメリカ留学からの帰国後、YWCAにおいて児童指導の仕事に携わる。関東大震災翌年の1924年に東京市公園課井下清<sup>注2</sup>に要請され、東京市公園課児童遊園掛となり、児童遊園指導員の中心となって、子どもの遊びの指導と母親への厚生指導の役割を負う。末田は、『幼児の教育』誌に「幼児の遊場」他数編<sup>注3</sup>を寄稿している。他に、20年間の児童遊園での活動を報告した著書『児童公園』（1942）などがある。

末田は、「遊びによって健康体となる」<sup>iv</sup>と、子どもにとっての外遊び（児童遊園）の意義を述べ、関東大震災前に設立された既設公園と震災後に設立された復興公園に設けられた児童遊園の設備を紹介する。さらに、「子どもたちが1日の中3、4時間くらい遊び場で光線に浴しながら嬉々として自由に或は共同して遊ぶことは、衛生上、体育上肝要なことは勿論、徳育を知らず知らずの中に自覚」し、「子どもの体重は増えるし、皮膚は丈夫になって風邪をひかないし、食欲も多くなり、色は真っ黒になった」<sup>v</sup>と、児童遊園の機能と意義を示す。また、「午前は学校へ行かない近所の幼児を（略）午後は小学校へ通う子どもを中心に」、「毎水曜日午後3時から4時迄クラブを設け」、童話、遊戯や人形芝居をしたり、「冬は凧揚げ、羽根つき、縄跳び、秋は競争的遊戯、夏は水遊び砂遊び……」<sup>vi</sup>などと、指導対象の子どもと活動内容を報告する。そして、「公私の幼稚園を一定の時間を定めて開放せられたならば、この狭苦しい都下の子ども達にとって、どれだけの幸福であろうか」<sup>vii</sup>と、幼稚園に対して、子どもたちの遊び場として幼稚園の開放を勧告する。

坂内もまた、『子供の遊ばせ方』において、心身の健康のために「自由自在に活動させたい（略）それには戸外の遊びでなくてはなりません」<sup>viii</sup>と、「自然に親しめるため」、「相互生活をさせ身体を強壮ならしむるため」と室外遊びの目的を述べる。さらに「友達と遊ばせよ」、「庭園を開放せよ」、「相当に設備せよ」<sup>ix</sup>と説き、末田と同様に、光線と戸外の空気と自由な運動が快活な精神と身体を育てると、外遊びの重要性を述べている。

坂内は、「室外では大人が計画してやる遊びよりは、子ども同士で遊ぶのでありますから、その遊び方を知るよりはその目的によって、設備すべきものや注意すべき点を、考える方が良いと思う<sup>x</sup>と、外遊びでは、子ども同士で自発的に遊ぶことを大人が計画する遊びより優先し、設備による誘導が中心になると述べて、家庭や幼稚園を含む地域に向けて砂場や誘導円木、ブランコの作り方を図入りで示す。そして、「子どもの好む外遊びの種類」として鬼ごっこ・開戦ごっこ・かけっこを中心に17種類の動的な遊びと3種類の静的な、いずれも友達との相互関係を楽しむ遊び方を中心に紹介している。

このように、関東大震災の翌年から東京市公園課児童遊園掛として活動する末田と同様に、東京女子高等師範学校附属幼稚園保母である坂内は、関東大震災の翌年に上梓した『子供の遊ばせ方』において、外遊びを奨励する。しかし、当時の子どもたちが置かれていた状況は、「庭園の広い家でも、野原につづいている家でも、子どもの生活はやはり、室内に居る時間が多<sup>xi</sup>」として、『子供の遊ばせ方』の構成においては、「室外の遊び」は「室内遊び」の後に配されている。この、「室外の遊び」は、「幼児の遊びと導き方」(1937)では、「体育方面の遊び」と項目名を変えて総説の次に、つまり、遊びの分類の最初に配され、より重要視されている。遊びの数は27種類と「室内遊び」13種類に対して、倍の数の遊びをあげ、「五、六歳に至れば、単に養護だけを考えておれば、子どもの身体は弱くなり神経質に傾く、運動をして適度に身体を鍛えなければなら<sup>xii</sup>ず、「この頃になると運動も自由になるので、自然に盛んになるのである。その運動の根本ともなるべきものは、投げる事、走る事、跳ぶ事である。その他相撲、山登りなど種類が多い。今一つ一つについて書いてみる<sup>xiii</sup>」と、遊びへの見解が、子どもの発達に沿って養護から適度に鍛える方向に、また、運動の基本動作と遊びと運動部位を関連づけて様々な遊びをあげながら、「鞠投げ キャッチボールをするほどにはまだ発達していないのであるが、投げたい意思是、充分あるのであるから、その意思を満足させるようは設備が必要である<sup>xiv</sup>と、運動能力と子どもの意欲との関連を述べて、子どもたちがより面白く子どもたち自身で遊べるようにするための、大人の配慮と注意事項を述べている。

また、坂内は、末田より先んじて、『子供の遊ばせ方』において、「庭園を開放せよ」、「所々に小公園を設け、子どもを遊ばせる目的で設備し、誰も彼も運動服のまま、遊びに行けるようにしたい」として、「まず幼稚園、小学校などを放課後に開放すること」を提案するとともに、「今日の制度で、学校の先生に、その監督を頼むことはできません、(略)何かの制度を設けて、監督する人を決め、実行したならば、救われる子どもが、どんなに、多いことでありましょう」と「要はその数の多い事である<sup>xv</sup>と、制度上の改革を含めて訴える。

ここで、坂内の論考において注目するのは、児童遊園掛の末田が、設備された遊具で「心ゆくばかり」遊ぶことを重視しながらも、指導員が子どもの遊びを指導することに力点を置いているのに対し、幼稚園保母の坂内は、地域や家庭においても、設備に誘導されて自発的に友達と遊ぶことを重視し、そのための大人の配慮と注意事項が述べていることである。この相違は、児童遊園の指導員をその中心となって指導する立場であった末田と、幼稚園保母として、子どもの育ちに視点を置く立場の違いから生まれたものであろうが、坂内の視点が子

どもと子どもの遊びから離れないことを際立たせている。

『子供の遊ばせ方』には、「デパートメントストアの遊び方」と「郵便のあそび方」が、「室内遊びの仕方 団体の遊び方」に分類されている。その説明には、「社会生活の一部を理解させるのによい遊び」<sup>xvi</sup>であり、「土地の風習によってこの年齢の子どもが実際に買い物をしたりお使いをしたりしているところではお金の代用となるものを使用した方が良い」<sup>xvii</sup>と述べられている。これらは、後に「幼児の遊びと導き方」において、「社会的な遊び」と分類される「売買あそび」「郵便遊び」と記述内容が似ており、「社会的な遊び」の概念への基礎を見ることができる。さらに、訂正増補版『子供の遊ばせ方』(1929)では、「小学校二、三年位の子どもですと一層面白くできます」<sup>xviii</sup>と増補する。

また、「売買あそび」では、「いろいろの草を集め八百屋を開業するものがあれば、小石を拾ってお金と約束し、買い手となるものがある」<sup>xix</sup>と子どもの姿を述べ、同じく「社会的な遊び」としてあげる「ままごと」では「お庭の桜の木の下にごぎを敷き、「お米にはイヌタデの花やイヌノスカナの実を取ってくる。野菜には手近の草を抜けば良い」<sup>xx</sup>と、同じく「兵隊あそび」では、「裏の空き地で時ならぬラッパの音がすると思ってみれば」<sup>xxi</sup>と、戸外で遊ぶ様子が述べられる。このように、坂内の「社会的な遊び」という概念は、坂内が外遊びや室内での団体の遊びについて述べる、友達との相互関係を楽しむだけではなく、大人の生活や仕事を真似る概念が加わっていることが解る。

## (2) 神原キク『大売出し』あそび<sup>xxii</sup> (1934) と、坂内ミツ「売買遊び」<sup>xxiii</sup> (1937)

ここで取り上げる、東京女子高等師範学校保姆神原キクの保育記録『大売出し』あそびは、1932年に『幼児の教育』誌に寄稿された後、1934年、倉橋惣三著『幼稚園保育法真諦』「第四篇 誘導保育案の試み」として掲載される、東京女子高等師範学校附属幼稚園保姆による保育記録5編の内の1編である。神原キク『大売出し』あそびは、本研究テーマである「社会的な遊び」の「売買遊び」と、遊びの内容が似ているので、ここに取り上げて比較・考察し、坂内の「社会的遊び」の概念をより明らかにしていきたい。

神原キク『大売出し』あそびが、「誘導保育案の試み」に編まれた1934年当時、坂内は、1929年創立の私立大和郷幼稚園主任保姆に任じて5年を経ており、前職<sup>注4)</sup>である東京女子高等師範学校附属幼稚園で培った保育力を基に、大和郷幼稚園の子どもたちとその家庭に適した保育方法と内容を探りつつ、「女高師<sup>注5)</sup>ではできなかった(略)自由遊び理論が、(略)実施できた」<sup>xxiv</sup>と言うように、坂内自身の保育論を実際に具体化しながら築きつつある時期に当たる。「幼児の遊びと導き方」を著し、「社会的な遊び」を分類項目にあげるのはこの3年後である。

ここで、坂内ミツ「講習所感」<sup>xxv</sup>に、触れておきたい。これは、1933年、日本幼稚園協会夏期講習会の感想である。坂内は、倉橋惣三が誘導保育案を提唱した「幼稚園保育ノ真諦並に保育案、保育過程ノ實際」の講義内容の感想<sup>注6)</sup>として、「初めと終わりは符号を合わせたように思われ得意でしたが、途中で悲観しました」と書く。「中間」とは、倉橋の講義題目「幼稚園保育ノ真諦並に保育案、保育過程ノ實際」の内容項目である「幼稚園保育の真諦」

「保育案」「保育過程の実際」の中間に位置する、「保育案（誘導保育案）」と解釈できる。また「充実指導・誘導・教導」の中間である、「誘導」とも解釈できる。坂内が、講義内容を自園の保育の実際と照らし合わせて、主題へと子どもたちを誘導していくところがうまくいかない。力不足故であるが、「幼児個人個人のことを考え過ぎるために相違ない」としていることを、比較・考察の手がかりとしたい。

では、神原キク『『大売り出し』あそび』から、この遊びの始まりである「相談会」の一部分を引用する。

相談会 土台から幼児を働かせるがいい。そこで最初は相談会です。みんな寄り集まったところで、「今年も大売り出しをしましょう。」と話しかけます。

一言で、もう子どもたちは踊り上がります。(略)

— 何のお店がいいでしょうね

— 子どもの好きなお店はなあに

(略) 言い出すものを黒板に書いてやります。何にしても玩具屋が「うりや」の焦点です。

— 玩具屋さんで、何んなものを売りましょうか

— 男の子たちには何がいい？ 女の子には？

(略) 以上訂正整理しながら黒板に書いてやる。

— こんなにたくさんのお店はこのお部屋に並ばないから後で先生が決めましょうね。  
そして早くご用意してお店を始めましょう。

これで相談会は終わる。この中から効果の上がりそうな、作りやすそうな五店と商品を選定し、売り出し日までの準備仕事の日程を編む。

(神原キク 三 「大売り出し」あそび<sup>xxvi</sup>)

倉橋は、『幼稚園保育法真諦』において、「誘導保育案たるや、子どもが見れば、知らず知らずそれを中心とする生活興味に引きづられてゆくのですから、(略) 子どもが来るより先にあるものでなければならない」<sup>xxvii</sup>と、子どもより前に案として保姆による主題<sup>注7)</sup>があるべきことを述べている。

引用した神原の『『大売り出し』あそび』の保育記録では、「土台から幼児を働かせるがいい。そこで最初は相談会です」と、子ども全員を集めた「相談会」において、保姆神原が子どもたちの好きな活動として取り上げた主題「大売り出し」あそびを、子どもたちに向けて、「今年も大売り出しをしましょう。」と呼びかける。子どもたちの興味と関心にあっているため、子どもたちは大喜びする。「相談会」を持ち、子どもたちから意見を聞いた後で、「こんなにたくさんのお店はこのお部屋に並ばないから後で先生が決めましょうね。」と言って、子どもたちから意見として出たお店の「中から効果の上がりそうな、作りやすそうな5店と商品を選定し、売り出し日までの準備仕事の日程を編む」のは保姆神原である。以下、神原の記録は「商品、材料、作り方」、「準備の一週間」、「宣伝、ポスター、ビラ、案内状」、「いよいよ『売り出し』」、「経済的に」「省みて」と、保姆神原の計画に沿って、何をいかにして作り、子どもたちに指示して活動を進めた内容が続く。この保育記録の中で、子どもの声や様子が



記されている箇所は、引用した「相談会」と「いよいよ『売り出し』」の子どもの呼び込みの声に見られるだけである。

次に、坂内が「幼児の遊びと導き方」において「社会的な遊び」と分類した「売買あそび」から引用する。

八百屋 自然物を用いることは都会では難しいが、是非味わせたいものである。郊外のつみ草は獲物が欲しいのではない。栗拾いや茸狩りとても栗と茸が唯一の目的ではない。郊外で子どもを遊ばせるのが本体である。草原の上を駆け巡ること元より良いには相違ないが、こんな時を利用して、いろいろの草を集め八百屋を開業する者があれば、小石を拾ってお金と約束し、買い手となる者がある。こうして何時までも面白く遊ばせたいものである。

売品の芋や大根は次々と容易に補給されるところが良い。お店も只一軒では面白くない。買うばかりでもつまらない。売ったり買ったりするように、お菓子屋ができたり魚屋ができたりすると面白い。

(売買あそび「社会的なあそび」「幼児の遊びと導き方」<sup>xxviii</sup>)

誘導保育案の試みである、神原の「『大売出し』あそび」のように、保姆や大人の「売買遊び」の案が先にあるのではない。子どもを遊ばせるために行った郊外で、「いろいろの草を集め八百屋を開業する者があれば、小石を拾ってお金と約束し、買い手となる」遊びが子どもたちから始まる様子が記される。売る品もそのあたりの草から補給できる。遊びがいつまでも面白くなるように「売ったり買ったりするように」、「お菓子屋ができたり魚屋ができ」るようにと、保姆や子どもと遊ぶ大人の願いとともに、遊びが面白くなるように、誘導する方向への示唆が記されている。

砂糖屋 煉瓦を擦って褐色の粉を作って赤い砂糖にして、ろう石を丁寧に擦ったり白墨を粉にしたりして白砂糖をつくる。これを売るために秤を造らねばならぬ。砂糖を入れる袋も貼らねばならぬ。店を出すまでの工作が大事な遊びの一つである。

秤は割り箸を一本貫って秤の竿にする。お皿は厚紙に糸をかけるようにし、小石を分銅にして目盛りをつける。これらのものを作ることが何よりよい遊びである。1日に準備出来かねる時は二日がかかりでもよい。1日で準備が出来上がったなら二日目は売買を主とする。かように継続して仕事をするのはよい事で子どもの遊びはその時限りであるが、長ずるに連れて継続的な遊びもさせたいものである。 (同上<sup>xxix</sup>)

坂内は、「幼児の遊びと導き方 総説」の冒頭において、「幼児の生活は即ち遊びである。幼児の遊びは幼児生活の全体であると言っても過言ではない」<sup>xxx</sup>と述べていることを考えると、坂内の文章において「遊ぶ」主語は子どもであると推察できる。つまり、煉瓦を擦って褐色の粉を作るのは子どもであり、これを売るために秤を作らねばならぬのも子どもである。

子どもが主体的に自発的に、作らねばならぬ秤を試行錯誤し、店を出すまでの過程を次から次へと遊びとして真剣に取り組む様子が描かれる。その後ろに、子どもの遊びを見守り、煉瓦の次にろう石や、秤を作るための割り箸を用意し、子どもが作りたいと思えるように誘導し、実現するために、例えば、子どもと一緒に、秤のお皿を厚紙に糸をかけて作り、小石を分銅にして目盛りをつける保姆や子どもと遊ぶ大人の姿が見えてくる。その時限りである子どもの遊びを継続的な遊びへと、子どもの興味・関心が持続するように願う保姆や子どもと遊ぶ大人の役割が見えてくる。

坂内は、「幼児の遊びは幼児生活の全体である」が故に、「幼児の遊びを指導するのは生活全体を指導することになる」<sup>xxxI</sup>と、遊びによる生活全体の指導を説く。例えば、「五、六歳の子どものでも深窓に育って一度もお金を数えたことがない、買い物について行ったことはあっても、自分で買物をしたことがないおさんは、財布を渡されてもどうして買えばよいかわからない。(略) 大人は個性をよく観察すると同時に、(略) 導いて買わせて、嫌な思いをさせないように気をつける」<sup>xxxii</sup>というように、一人で買物をしたことが無い子が、「売買あそび」で、買物をするという社会的な体験をする例を挙げる。

ここで注目したいのは、坂内が示す具体的な子どもの遊びが、神原の「『大売出し』あそび」のように大掛かりではないことである。坂内は、保姆や子どもと遊ぶ大人は、子どもが自発的に始めたささやかな遊びを観察し、遊びが面白く続くように設備したり、また、「品物を数えたり、売り上げを数えたり」というような、その遊びの効用に誘導することが大人の役割であると述べている。

先の神原の「『大売出し』遊び」では、保姆が用意した主題に沿って、お店の種類や制作の材料も最終的には保姆が決めて子どもたちに提示していた。坂内の記録のような、子どもから始めた遊びが面白くなるように、保姆が教材や素材を用意するような視点とは異なる。同じく「誘導保育案の試み」に、「人形のお家を中心として」の保育記録を掲載した、保姆菊池ふじのは、最後に「自身にたしなめております事は、作ることの面白さ出来上がりの喜びに、ともすれば、一人としての子どもを見逃しがちであるという事」であり、「この欠点に陥らぬ様心してこの計画を進めていきたい」<sup>xxxiii</sup>と、記している。菊池が言う「一人としての子どもを見逃しがちになる」とは、一人ひとりの子どもの気持ちよりも作ること、出来上がることを優先しがちになるということであろう。

ここでは、坂内が、子どもの遊びの発展を支える大人の役割は、一人ひとりの子どもとその背景、子どもが自発的に始めたささやかな遊びをよく観察すること、遊びが面白く続くように設備すること、そして、例えば「売買あそび」で買物という社会的な体験をするように、その遊びの効用に誘導することであるとして、保姆や子どもと遊ぶ大人へ示唆していることを明らかにした。

### 3. 「社会的な遊び」

「幼児の遊びと導き方」の構成を示し、「体育方面の遊び」「室内の遊び」「年中行事」「社

会的な遊び」と各項目内容を分析し、最後に位置付けられている「社会的な遊び」が意味するところを考察していく。

<p>一 総説</p> <p>幼児の遊びとは</p> <p>幼児を遊ばせるには</p> <p>幼児はどんな遊びを好むか</p> <p>体育について</p> <p>二 体育方面の遊び</p> <p>紙飛行機飛ばし</p> <p>毬投げ</p> <p>球入れ</p> <p>徒競争</p> <p>リレー</p> <p>鬼ごっこ</p> <p>かくれんぼ</p> <p>開戦</p> <p>水まき</p> <p>自動車ごっこ</p> <p>汽車ごっこ</p> <p>シングルベルズ</p> <p>跳ぶ事</p> <p>スキップ</p> <p>縄跳び</p>	<p>ジャンケン跳び</p> <p>相撲</p> <p>力くらべ</p> <p>綱引き</p> <p>重い物の運搬</p> <p>山登り</p> <p>花一匁</p> <p>さくらさくら</p> <p>砂場</p> <p>郊外散歩</p> <p>摘草</p> <p>自然物利用</p> <p>三 室内の遊び</p> <p>排べもの</p> <p>積木</p> <p>粘土</p> <p>人形づくり</p> <p>絵本の取り扱い方</p> <p>おはじきの利用法</p> <p>理解力の養成</p> <p>たゝみ紙</p> <p>探しもの</p>	<p>ジャンケン遊び</p> <p>椅子とり</p> <p>ハンケチ取り</p> <p>ものづくり</p> <p>四 年中行事と遊び</p> <p>お正月遊び</p> <p>三月節句</p> <p>端午の節句</p> <p>七夕</p> <p>お月見</p> <p>年の暮</p> <p>五 社会的な遊び</p> <p>まゝごと</p> <p>賣買ごっこ</p> <p>郵便遊び</p> <p>兵隊遊び</p> <p>六 結論</p>
---	--	---

総説の冒頭で、「幼児の生活は即ち遊びである。幼児の遊びは幼児生活の全体であると言っても過言ではない。(略) 故に幼児の遊びを指導するのは生活全体を指導することになるので、子どもを育てるには最も大切なことである」と、坂内の子どもの遊び観と保育観を示している。幼児を遊ばせるに「誠意をもって本気で遊んでやることである」<sup>xxxiv</sup>と、大人の「誠意」と「本気」が、子どもの信頼を得るために最も大切で、大人の心構えの根本であることを説く。さらに、「幼児は精一杯力いっぱい遊びたい事、(略) 結果よりその道程を楽しむ」<sup>xxxv</sup>事と、幼児の遊びの特徴を、積み木と描画を例に出して述べる。これは、大人の遊びと大きく異なる点であり、子どもの遊びと関わる大人が最も心しなければならぬ点である。とりわけ、「身体」が最も大切であり、「遊びの間に身体の各部を発達させるよう、(略) 誘導」する事を説き、子どもが自発的に身体を動かして遊び始めるように誘導する事の重要性を述べている。「それには、子どもはどんな遊びを好むか、どの遊びはどんな部分を発達させる



かという事を、しかと承知しておかなければならない」<sup>xxxvi</sup>として、次の各論で、一つ一つの遊びについて子どもの育ちを見るポイントと準備、方法、材料、子どもの心身への効用、子どもが自発的に遊べるように保姆と子どもと遊ぶ大人への注意事項を述べる導入としている。

「体育方面の遊び」では、「幼児期は一生のうち一番よく遊べる時」であり、「この頃になると運動も自由になるので、自然に盛んにな」<sup>xxxvii</sup>ることを示し、遊びの間に身体の各部を発達させるような遊びを選ぶこと、外遊びで友達と遊ばせることを説く。子どもの発達や心理面での育ちに関する研究が、保育の現場に行き渡っていなかった昭和前期において、保育の方法とその注意事項にまで、幼児期の特性を反映させていることは注目に値する。坂内は、研究者と実践家の協働を志向していたことを付記しておきたい。

「室内の遊び」では、その子に合った具体的な指導方針を決めるには、室内遊びでの一人ひとりの子どもの観察を勧める。「遊びの一つ一つを考えて見れば鍛錬される部分がちが」い、例えば「積み木は工夫力創作力を養い、職紙は正確と数とに力が入り、ままごとは常識を養い行儀作法を習得するなど各長所が異なる」ので、「大人はよく遊びの性質を知り、長所を捉え、配合をよくして一方に偏しないよう」<sup>xxxviii</sup>にしなければならないと述べる。保育の実現場面での、一人ひとりの子どもと、一つひとつの遊びへの観察眼にも驚かされる。ただ遊ばせるのではない、子どもの最も近くにいる大人である保姆の責任（専門性）を追求した坂内でもある。

「年中行事と遊び」では、子どもの生活に年中行事を位置づけ、主体的に関わる子どもの遊びとして捉えている。端午の節句では、「6、7歳以上にもなれば共同して大きな鯉を作らせると良い」<sup>xxxix</sup>とし、「七夕」、「お月見」、「年の暮」では、一家総出で地域での年中行事の準備をする中で、子どもは大人を真似つつ役割を担い、遊びとして楽しみながら、成長とともに地域社会の家族の一員としての自覚と役割が増していく様子が述べられる。子どもは、年中行事に参加する中で、大人社会との差異を自覚しながら学び、生活の潤いと伝統に位置づく感覚を学ぶことを示唆している。また、親類縁者や近所の方々が時々集まって遊ぶ事は、やがて社会人として生活して行くのによい準備となると述べ、学校では「性格や、番が回ってこずに、前に出してやれない子ども」も、家庭の行事で、「多く出して褒めておくと、勇気が出て自信がつく」と、子どもへの配慮を説く。学校と地域と家庭が、日常の中で、子どもの育ちに向けて協働する穏やかで温かな視線が語られる。

下線部分のように、「年中行事」を遊びとして主体的に楽しみながら取り組み、「やがて社会人として生活して行くのによい準備」として位置付け、家庭や地域が穏やかに温かくその素地を育てるといふ、坂内の年中行事の捉え方は、次の「社会的な遊び」を遊ぶ子どもの育ちを育む力となっていることが示唆される。

「社会的な遊び」の冒頭部分を引用する。

私たちが生活しているのは一個人としてではない。社会の一員として生活している（略）その社会人としての芽生えは子どもの時から現れる。三歳ともなれば社交性が現れ友達を欲しがらる。（略）子どもの友達に限るのである。（略）子どもは子供同士遊ばせなければならぬ。勿論積み木を積むにしても、人形を作るにしても、一人で遊ぶよりは

友達と一緒に遊ぶ方が面白いに相違ない。けれども一人で遊べる遊びである。

社会的遊びはそうではない。一人では遊べない。幾人か心を合わせて遊ぶのでなければ遊べない遊びである。 (5. 社会的な遊び<sup>xl</sup>)

「社会的な遊び」とは、友達と遊びたいから友達と遊ぶのではなく、「一人では遊べない。幾人か心を合わせて遊ぶのでなければ遊べない遊びである」と定義する。主な遊びとして、「郵便遊び」「売買遊び」「ままごと」「兵隊遊び」をあげ、それぞれの遊びの具体的な姿を描いている。

そして、「社会的なあそび」が、最も愉快地に展開する年齢について、「秩序だったままごと」は七、八歳以上にならないと出来ぬ<sup>xli</sup>、「品物を数えたり、売り上げを数えたりして数え方の練習にもなる。あまり小さい内はさして興味を示さないが、八、九歳の子どもは一番乗り気になって面白がる」<sup>xlii</sup>、「尋常二、三年の子どもがこの郵便遊びをすると実に面白くできる」<sup>xliii</sup>と述べている。他には、「体育方面の遊び」の「開戦」に、「これは六、七歳にならないと理解できない、十歳位になるとこれでは単純すぎて面白くない」<sup>xliv</sup>と、同様な指摘がある。これは坂内が、子どもと子どものあそびを観察する中で、いわゆる幼児年齢だけではなく、7、8、9歳にまで視野を広げて対象としなければ、子どもの遊びについては十分に語れないことを示している。この点についての検証は別の機会に行いたい。

また、筆者は、「兵隊遊び」の記述に、他の三つの遊びとの違和感を感じている。例えば、「鉄砲にせよ剣にせよ実物に近いものを持たせて喜ぶのは大人であって、子どもはさほど感じないのではあるまいか、木切れでもたけ切れでも真の鉄砲、真の剣と思っているのである」<sup>xlv</sup>と、子どもが持つ見立てる力、想像力を述べているが、その一方で「3月10日陸軍記念日」以降の記述には、「日章旗は寸法が定められてあるのであるから、たとえ玩具に使うものにせよ、寸法に準じて作るべきものであると思う」として、定められている寸法を述べ、軍艦旗に至っては、「その道の方から教えていただいたので」とさらに細かく記している。戦時色が強まる時代の影響であると考えているが、検証は別の機会に行いたい。

こうして、各項目に沿ってみると、この各項目が、並列ではなく、子どもの育ちに沿って積み重なって現れる遊びの各層であることがわかる。

一人ひとりの子どもの育ちを、「体育方面の遊び」で心身を充実させ、様々な遊びで一人ひとりの子どもが培った様々な力を「室内の遊び」での観察で確認して、さらに培い、地域や家庭における「年中行事」を子ども自らが遊びとして参加し楽しむ中で、大人を真似ながら役割を担い、「やがて社会人として生活して行くのによい準備」として位置付け、家庭や地域に穏やかに温かくその素地を育てられて、幾人か心を合わせなければ遊べない「社会的な遊び」を楽しめる子どもの育ちを育む力となっている。そして、一層、「社会人としての芽生え」を培っていくという構造になっている。

#### 4. まとめと課題

関東大震災は、東京女子高等師範学校附属幼稚園保姆として子どもたちと生活していた坂内に、社会的な視野をより開かせ、東京の子どもたちの健康な育ちにとって重要な外遊びと遊び場の必要性を世間に訴えた。また、東京市児童遊園掛末田の活動が、坂内に、幼稚園の社会（地域）における役割と、幼稚園と家庭における子どもの遊びの意義と大人の役割についてより深く考えさせたことは、容易に想像できる。

「子どもの遊びと導き方」における、子どもと子どもの遊びへの視点の特徴を、神原キク「誘導保育案の試み 『大売出し』あそび」との比較から探った。「誘導保育案の試み 『大売出し』あそび」では、保姆の意識において、誘導保育案の主題に向けての保姆主導の活動が、子どもの思いよりも優先するが、坂内は、子どもがささやかに始めた遊びを、子どもが自分たちでさらに面白く遊べるように、設備（教材を含む）による誘導、または大人の配慮で、一人ひとりの円満な育ちへと誘導する。

その坂内の姿勢は、一人ひとりの子どもの育ちを、「体育方面の遊び」で心身を充実させ、「室内の遊び」で、さらに様々な力を養い、地域や家庭における「年中行事」を子ども自らが遊びとして参加し楽しみつつ、大人を真似ながら役割を担い、「やがて社会人として生活して行くのによい準備」として位置付け、家庭や地域に穏やかに温かくその素地を育てられて、「社会的な遊び」を遊ぶ子どもの育ちを育む力へと導いている。

ここに、坂内が「社会的な遊び」を「一人では遊べない。幾人か心を合わせて遊ぶのでなければ遊べない遊び」とした定義に、さらに「役割を担えるまでに育った子どもたちによって可能になる遊び」であり、「社会を営む大人を模した遊び」であり、「七、八、九歳くらいの子どもの最も楽しめる遊び」という定義を付したい。

このように、「まゝごと」「売買遊び」「郵便遊び」「兵隊遊び」を例とした「社会的な遊び」は、室内室外を問わず、家庭から社会へ向けての興味関心が育ちつつある子どもたちによって遊ばれ、社会で営まれる役割と仕事を模して遊ぶ中で、社会人としての芽生えが生まれ、さらに社会の仕組みを理解していき、地域や家庭の年中行事などで大人と共に役割を担うことも可能になっていく力を育てていく。

坂内の子どもと子どもの遊びへのまなざしは、各々の遊びが持つ子どもの育ちへの効力や、遊びの中で育つ一人ひとりの子どもの育ちと子ども同士の繋がりやの育ち、そして、子どもの育ちに伴う遊びの質の変容を見つめている。さらに、7、8、9歳頃の子どもたちには、子ども同士が心を合わせて遊ぶばかりでなく、家族、地域社会の一員としての意識が芽生え、大人の社会を模して、役割を担いながら遊ぶ姿を保証しようとする。

最後に、坂内が配した「体育方面の遊び」「室内遊び」「年中行事と遊び」「社会的な遊び」の順序は、子どもの遊びを並列に並べたものではなく、遊びの中で育つ子どもの育ちが次の遊びを誘発するように、重なりながら現れる子どもの遊びの育ちの変容を表しており、遊びが現れてくる道筋の順序であると考えている。

今後の課題として、本研究が対象とした坂内著「幼児の遊びと導き方」は、坂内の保育実

際論『幼稚園生活』(1939)の基盤になっていると考えている。さらに、坂内ミツについての研究を進め、坂内の保育実際論の形成過程と幼児教育史における坂内ミツの功績を追究していきたい。

## 引用文献

- i 坂内ミツ 「幼児の遊びと導き方」『幼児教育全集第5巻 幼児の遊びと玩具』刀江書院, 1937.
- ii 坂内ミツ 『子供の遊ばせ方』教文書院, 1924.
- iii 末田ます 『児童公園』清水書房, 1942. p.1. 井下清「序」.
- iv 末田ます 「幼児の遊場」『幼児の教育』日本幼稚園協会, Vol.30 No.6, 1930, p.24.
- v 末田ます 同上書, pp.23-24.
- vi 末田ます 同上書, p.24.
- vii 末田ます 同上書, p.30.
- viii 坂内ミツ 前掲書, ii) p.95.
- ix 坂内ミツ 同上書, p.97. p.107. p.109. p.113. p.115.
- x 坂内ミツ 同上書, pp.96-97.
- xi 坂内ミツ 同上書, p.28.
- xii 坂内ミツ 前掲書 i), p.127.
- xiii 坂内ミツ 同上書, p.128.
- xiv 坂内ミツ 同上書, p.130.
- xv 坂内ミツ 前掲書 ii), p.114.
- xvi 坂内ミツ 同上書, p.47.
- xvii 坂内ミツ 同上書, p.51.
- xviii 坂内ミツ 『子供の遊ばせ方』教文書院, p.71.
- xix 坂内ミツ 前掲書 i), p.211.
- xx 坂内ミツ 同上書, p.209.
- xxi 坂内ミツ 同上書, p.219.
- xxii 神原キク 「『大売出し』あそび」倉橋惣三『幼稚園保育法真諦』「第四篇 誘導保育案の試み」所収, 東洋圖書株式会社, 1934, pp.175-299.
- xxiii 坂内ミツ 前掲書 i), pp.211-216.
- xxiv 坂内 丹 「大和郷幼稚園と母」『大和郷幼稚園創立六十年記念誌』大和郷幼稚園, 1989, p.17.
- xxv 坂内ミツ 「講習所感(会員感想)(日本幼稚園協会夏期講習会)」『幼児の教育』Vol.33 No.9, 1933, pp.104-105.
- xxvi 神原キク 前掲書 xxii), pp.235-257.
- xxvii 倉橋惣三 前掲書 xxii), p.123.
- xxviii 坂内ミツ 前掲書 i), pp.211-212.
- xxix 坂内ミツ 同上書, p.212.
- xxx 坂内ミツ 同上書, p.119.
- xxxi 坂内ミツ 同上書, p.119.

- xxxii 坂内ミツ 同上書, pp.215-216.  
xxxiii 菊池ふじの「人形のお家を中心として」前掲書21), p.233.  
xxxiv 坂内ミツ 前掲書 i), p.121.  
xxxv 坂内ミツ 同上書, pp.123-124.  
xxxvi 坂内ミツ 同上書, p.127.  
xxxvii 坂内ミツ 同上書, p.128.  
xxxviii 坂内ミツ 同上書, p.167.  
xxxix 坂内ミツ 同上書, p.203.  
xl 坂内ミツ 同上書, p.208.  
xli 坂内ミツ 同上書, p.210.  
xlii 坂内ミツ 同上書, p.216.  
xliii 坂内ミツ 同上書, p.218.  
xliv 坂内ミツ 同上書, p.135.  
xlv 坂内ミツ 同上書, p.219.

## 注

- 注1) 坂内ミツ『幼稚園の生活』賢文館, 1939。「一方に偏せず円満な発達」p.3、「円満に豊かな感情」p.3、「社会的生活も円満に行われる」p.4のように用いられている。
- 注2) 井下清(1884~1973) 明治・大正・昭和の公園設計者。大正12~東京市役所公園課長。井之頭公園、多摩墓地、関東大震災後の帝都復興事業として復興小学校位併設された52の東京市立公園を設計築造、後に東京農業大学教授。
- 注3) 末田ます「幼児の遊場」Vol.30 No.6, 1930。「紙袋・包紙・古新聞を利用してつくるお人形さん」Vol.31 No.6, 1931。「子供の遊び場」Vol.32 No.3, 1932。「児童遊園に欲しい植物」「同(續)」Vol.32 No.11/12, 1932。「冬季戸外での遊ばせ方」Vol.42 No.1, 1942。「女学生の勤労奉公隊所見」Vol.43 No.8, 1943。
- 注4) 坂内は、東京女子高等師範学校附属幼稚園に1912年から1924年まで奉職し、主事安井てつの下で5年7ヶ月間、倉橋の留学期間を挟んで4年5ヶ月間を主事倉橋惣三の下、倉橋が留学中の2年間を小学校主事兼務の藤井利誉の下で勤務している。関東大震災を経て『子供の遊ばせ方』を上梓直後に退職する。東京女子高等師範学校在籍中は和田実にも師事している。
- 注5) 「女高師」は、東京女子高等師範学校附属幼稚園。
- 注6) 倉橋の講義内容に対して、1. 保育の真諦ではなく保育方法の真諦である。2. 自園の実際と照らし合わせてみて、中間(主題へと子どもたちが誘導せられていくところ)がうまくいかない。力不足故であるが、幼児個人個人のことを考え過ぎるために相違ない。3. 幼稚園の設備も保姆の力も幼児も理想的であることを前提とした保育案ではないか。4. 園環境によって近き将来の目的、幼児現在の目的は異なるので、お説を実行する際の個々の園の疑問を解決していただき、各園にふさわしい実行方法をとらねばならぬ。(筆者まとめ)と、記している。
- 注7) 1933年倉橋講義では「テーマ」とし、1934年『幼稚園保育法真諦』では「主題」としている。